

作品タイトル 仕組まれた救済
元にした作品 杜子春
著者名 今井 路

あらすじ

パチンコ依存症で大学を中退し、家族からも見放された利治はホームレスに身を落としていた。ある日千田と名乗る男と出会い、今の生活から抜け出す手伝いをしてやるという言葉に乗せられて犯罪に巻き込まれていく。心の弱さ故、同じ失敗を繰り返す利治。やがて殺人の罪まできせられ、逮捕されてしまう。

本編文字数 5000字

利治は徹夜明けで眠い目をこすりながら公園のベンチに腰を下ろした。日雇いの日当が入った封筒をズボンのポケットから出して数える。八千七百円。弁当と缶ビールを買っても八千円は残るだろう。胸に響くようなパチンコ屋の騒音が蘇る。ドル箱が銀色の球で満たされる感覚は絶望と眠気を吹っ飛ばした。

彼がパチンコに嵌まったのは大学に通う為に上京して直ぐだった。元々将来の目標があった訳ではない。旧家に育った彼の父は厳格な独裁者だった。その父から離れた一心中で地方の高校から東京の大学を受験したのだ。

幸か不幸かその願いは叶えられたが、内向的な田舎者に興味を持ってくれる学生はいなかった。彼の孤独を癒したのは学業でも学友でもなく近所のパチンコ屋、再三の借金トラブルに家族からも見放され、二十二歳になった彼は大学を卒業するどころか日雇い労働者が集まる街でホームレスになっていた。

「お兄ちゃん、その金何に使うんだい」

突然声を掛けられ、ビクっとして顔をあげた。六十過ぎの労働者風の男が立っている。この公園はホームレスの溜まり場だ。男は馴れ馴れしく隣に腰を下ろし、利治が持っている金を見てニッコリ笑った。

「なんですかいきなり、俺が自分の金を何に使おうがあなたに関係ないでしょう」

利治は素早く金をポケットに押し込み立ち上がった。

「それっぽっちの金をパチンコに注ぎ込んでも出ないよ。まあそう急ぎなさんな。ちょっと話しでもしましょうや」

その男は千田と名乗った。利治の事は以前から知っていて何度か日雇いの仕事も一緒だったという。てっきり酒でもたかれるのかと思ったが、そうではなかった。利治がこの生活から抜け出すための手助けをしてくれるというのだ。日雇いの仕事も今より割のいい伝手があるらしい。その言葉を鵜呑みにした訳では無いが、あながち騙そうとしているようには思えなかった。

千田の家は六畳一間の古いアパート、他の住居では何人かの労働者が共同生活をしている。一人で家賃を払える千田はまだ裕福な方だ。汚いアパートの割に部屋の中はこざっぱりとしていた。千田は泊まりの仕事が多らしく家に帰るのは週に一二度だと言う。利治はしばらくこの部屋に間借りすることになった。驚いたことに千田は朝と寝る前に窓際に置いたマリヤ像に手を合わせていた。

「まずは一か月パチンコをせずに過ごしてみろ。それが出来たら大きな儲け話をしてやろう。日雇いの金は肌身離さず持っていた方がよいぞ。このアパートは物騒だからな」

利治のポケットには少しずつ日雇いの金が貯まっていた。パチンコ屋の前を通る度にザワザワと虫が騒ぎ出す。たった一か月の辛抱だ、儲け話さえ聞き出せば後は好きにするさ。利治はギャンブルの虫を眠らせる為に仕事を増やしてクタクタになるまで働いた。

「金は貯まったかい。パチンコに行けない一か月は辛かっただろう。お前の本気が分かったから話すんだが、聞いたら後には戻れないぞ。それでも聞かないか」

「ヤバい仕事ですか」

「当たり前だ。上手くいけば大金が手に入る、しくじればタダではすまない。止めたければ、俺の話をお聞きせずにポケットの金を持ってアパートを出て行っても構わない。どうする。決めるのはお前だ」

「聞きます。やらせて下さい」

千田の儲け話は想像以上に突拍子もない話だった。

「信州の山奥の山荘に死体が埋まっている。山荘の持ち主が殺し屋を雇って自分の兄貴を殺させたんだ。俺はその雇われた殺し屋を知ってるんだがな、奴は報酬を受け取らずに死んでしまった。何故だか分かるか？簡単なことだ。依頼人に殺されちゃったからさ。依頼人は兄貴の死体が自分の山荘に埋まっているなんて思いもしないだろう。奴は殺される前に死体と証拠として爆弾を山荘に仕掛けていたのさ。それを知っているのは俺だけだ。俺達はその爆弾を掘り返して奴が受け取るはずだった報酬を依頼人から戴く」

千田はレンタカーを用意していた。殺し屋が埋めた死体と証拠を掘り起こすためだ。高速道路を降りた後は何処をどう走ったのかまるで分らない。山道を抜けて少し開けた場所に着くと、洒落たペンション風の山荘が見えてきた。広い敷地の隅に掘っ立て小屋がある。千田はその前に車を止めてトランクからスコップを取り出した。小屋は六畳ほどの広さで中はがらんとしている。腐りかけた床板を何枚か外すと地面が現れ、湿った土がカビ臭を放った。スコップを入れる度に体がゾワゾワと震えだす。本当に死体が埋まっているのだろうか。利治は背中に冷たいものを感じながらも千田の言葉に従わないわけにはいかなかった。恐怖心を噛み殺し、無心で掘り進めるとスコップがビニー

ルシートを引っ掛けた。

千田と顔を見合わせて、手で土を払いゆっくとシートの中を確かめる。毛布に包まれていたらしい死体は胎児のように折りたたまれ、すっかり白骨化していた。肋骨のあたりに小さなジュラルミンのケースを抱いている。これが証拠の品なのか。千田は骨の一部と遺体からケースを剥ぎ取った。ケースの中には IC レコーダーと山荘の鍵が入っていた。

「俺はこれから何をするんですか」

「お前には依頼人のオフィスに荷物を届けてもらう。今日はこの山荘に泊まって明日の朝一番で立つんだ。後で使い方を教えてやるから護身用に拳銃を持って行け」

「拳銃って、オフィスに荷物を届けるんですよね」

「念のためだよ」

翌日、利治は松本駅から一人でアパートに戻ると千田の用意した宅配業者の服に着替え、音声データのコピーと白骨の一部、そして預かった脅迫状を梱包し、依頼人宛の送り状を貼り付けてオフィスの受付に荷物を届けた。千田が帰るまではアパートで待つように指示されていたが、これからの事を考えると不安でならない。利治は逃げ出したい気持ちを抑え拳銃の入った鞆を抱いて眠れぬ夜を過ごした。

だが利治の心配を他所に千田は三日目の朝、殺し屋が受け取るはずだった報酬を持って帰って来たのだ。利治がしたことといえば、遺体を掘り出し、配達員に扮して荷物を届けただけである。目の前の二千万円を千田がどうやって受け取ったのか利治は聞かされていない。

「ほんとに五百万円も分け前を貰っていいんですか」

「もちろんさ、お前さんが貝のように口を閉ざすのが条件だがね。預けた拳銃を返してくれるかい。それと最後にもう一つ、俺はもうここには帰って来ない。このアパートを引き払って荷物を全て処分してくれ」

「そんなことお安い御用です」

「それじゃ後の事は頼んだぞ」

「千田さんにもう会うことはないんでしょうね」

「さあそれはどうかな。先の事は誰にも分からんからな」

利治は早速に千田のアパートを引き払う準備に取り掛かった。殺風景な部屋には大した荷物もなかったが、マリヤ像だけは無下に捨てられずタオルに包んで鞆に仕舞い、後は金を払って業者に依頼した。山荘で白骨を見た時はどうなることかと思っただ、やけにあっけない幕切れだ。利治の手元には千田から貰った分け前の五百万円とひと月働いて貯めた十数万が残った。パチンコを我慢して日雇いの仕事に汗を流した日々が蘇る。欲しかった金が手に入ったのだ。押さえつけていたギャンブルの虫が、水を得た魚のように金を食い尽くしたのは言うまでもない。

利治は半年も経たないうちに元の一文無しに戻っていた。二日もろくに食べていない。炎天下の公園で水を飲んでいたら誰かが利治の肩を叩いた。

「袴田利治さんだね。ちょっと話が聞きたいんだが署まで同行してもらおうか」

「警察、僕は何もしていません」

「話は署でゆっくり聞かせてもらいますよ」

二人の刑事は利治の両側から腕を強く掴み半ば強制的に黒い車に押し込んだ。

利治の頭に千田の顔が浮かんだ。まさか千田が捕まって自分の事を話したのだろうか。両脇にいる刑事はピタリと体を寄せて彼の動揺を測っているようだった。警察署に着くと壁に囲まれた薄暗い部屋に入れられた。

「君はこの男を知っているね」

写真の人物は品の良いスーツを着た 50 代の紳士、千田ではなかった」

「僕はこんな人知りません」

「嘘を付いては困るよ。君はこの人の会社に宅配業者の配達員を装って小包を届けているじゃないか。防犯ビデオの映像に君が映っているんだ。この配達員は君だろう」

利治はオフィスの受付に荷物を届ける自分の映像を見せられ、初めて写真の男が千田の話していた依頼人だと気が付いた。

「この男は信州にある自分の別荘で殺されたんだよ。君はその重要参考人だ」

「殺されたって、俺はただ頼まれて荷物を届けただけです」

「誰に頼まれたんだね」

まさか、千田が依頼人を殺したのか。利治は急に恐ろしくなり一部始終を刑事に話した。

「作り話はたくさんだ」

「嘘じゃない。写真の人には会ったこともないんだ。千田に頼まれて」

「いいかげんにしないか。千田なんて男は捜査線上にも関係者にもいないんだよ。お前が届けた荷物から剥がした送り状が被害者の背広の内ポケットに残っていた。そこに付いていた指紋と凶器の拳銃の指紋とが一致しているんだ。いくら白を切ってもこの二つの指紋とお前の指紋を照合すればハッキリするんだよ。なぜ殺したんだ」

利治は目の前が真っ暗になった。自分は今、殺人の罪をきせられている。

凶器の拳銃の指紋は利治のものと一致し、別荘からは利治の髪の毛も検出された。千田の痕跡は跡形もなく消え、いくら本当の事を話しても信じてもらえない。それどころか小屋の床下からは白骨ではなく別荘の管理人夫婦の遺体が発見されたのだ。利治は三件の殺人の容疑で逮捕された。

利治はずっと考えていた。きっと二千万を受け取った後も脅迫し続けて殺したに違いない。あいつは殺人鬼だ。千田の存在を証明しないと俺が犯人にされてしまう。利治は刑事にマリヤ像を調べて欲しいと懇願した。必ずあの像に千田の指紋が残ってい

るはずだ。

「マリア像からお前以外の指紋が出たよ」

「ほんとですか、それは千田の指紋です」

「残念だがそれは違うね。その指紋には前があった」

「千田というのは偽名かも知れません。前科者が偽名を使ってたんだ」

「それも違うね」

「なぜそんなことが言えるんですか」

利治は刑事に飛び掛かった。

「落ち着け、座って話を聞くんだ。マリア像の指紋の持ち主は、死刑囚だ。一昨年、刑が執行されて既に死んでる」

利治は言葉を失った。千田という男の存在が忽然と消えた瞬間だった。絶望が負い被さり次第に思考回路の動きを止める。利治は自暴自棄に陥りポツリポツリとやってもいない殺人を自供し始めた。

利治に下された判決は求刑通り死刑だった。冤罪で刑に服する利治は、やせ細り蒼白の皮膚に目だけが恨みの色を宿していた。死刑囚には個別に教誨師の訪問がある。宗教心を伝え、心情の安定を図る為だ。

「初めまして袴田利治さん、あなたが心静かに過ごすお手伝いを私にさせて下さい」

顔を上げた利治の目の前に神父の服を着た千田が立っていた。

「何であんたがここに」

掴みかかる気力は長い絶念の日々でとっくに失われている。

「ずいぶん様子が変わったな」

変わり果てた利治を見て千田は薄っすらと笑みを浮かべた。

「なぜ俺だったんですか。あの公園はホームレスの溜まり場だった。他にいくらでも代わりが居たんじゃないですか」

「助けてやりたかったからだよ」

「まだそんなことを。俺はあんたに嵌められたんだ」

「だが、望みは叶っただろう。あの金で思いっきりパチンコができたはずだ。もしお前に別の望みがあったならそっちを叶えてやったさ」

確かにあの頃はパチンコの事しか頭になかった。だが今はその欲求さえ思い出せない。

「あんたは金と引き替えに俺を地獄に叩き落したんだ」

「地獄を見て来たのなら聞くが。この世に神がいるとして、お前は何処からやり直したいんだい」

「神なんかいるもんか。世の中、悪人だらけだ。その筆頭があんたでしょう。どうして殺したんだ。なぜその罪を俺にきせた」

「お前と此処で会うためさ。お前に必要な地獄を用意してやったんだよ。何処からやり直すんだい。決めるのはお前だ」

決めるのは…千田の口から同じ言葉を聞いた覚えがある。利治の記憶が走馬灯のように駆け巡り、気づけば労働者の臭いが立ち込めるアパートの一室で、裸電球に照らされたマリヤ像をぼんやりと見ていた。ポケットには昨日までの稼ぎの十二万円が入っている。我に返った利治はアパートを一目散に逃げだした。